



ステージではダンスや舞踊などが披露された

年に1度の文化の祭典

第32回大和町文化祭

11月19日と20日の2日間にわたって、第32回大和町文化祭(大和町文化協会主催)が大和公民館で催されました。文化祭ではバンド演奏や大正琴、歌謡、フラダンスなどの芸能の披露と、公民館の1階と2階の会議室などで絵画や生け花、大和町地区の各小学校の児童が書いた書道などの作品を展示。大ホールのステージでは、吟詠や健康ダンスなどこれまでの練習の成果を披露し、会場から大きな拍手が沸き起こりました。

火遊びは絶対しないもんね

第22回柳川地区幼年消防大会

市民体育館で11月11日、第22回柳川地区幼年消防大会が開かれました。大会には、市内の22の幼稚園と保育園から498人が参加。各園の代表園児22人によるくす玉割りや消防署のレスキュー隊員の模擬訓練、消防服の紹介があったあと、12のチームに分かれて防火綱引き大会、園児全員による歌や遊戯がありました。最後は、みんな大きな声で「私たちは絶対に火遊びはしません」などの防火の誓いを宣言しました。



そろいの法被を着てみんなで防火綱引き大会

市民のひろば

身近な話題などお知らせください！
情報をお待ちしています



柳川商工会議所の立花寛茂会頭(中)も試食会に参加

柳川新グルメはイソギンチャクで わけのつんきりだご試食会

ウナギに並ぶ柳川名物の料理を作ろうと、柳川料飲組合の飲食業部会は「ご当地新グルメ研究会」を立ち上げ、わけのつんきりだごを開発。11月16日に市内のレストランで試食会を行いました。わけのつんきりだごは、郷土料理のイソギンチャクのみそ煮をだご汁に入れたもの。イソギンチャク独特の泥臭さを消すためにショウガを使って下ごしらえされており、試食会では味とコリコリした食感がいいと好評でした。1月から市内10か所の飲食店で売り出される予定です。

振って混ぜるとバターができるよ

豊原小学校「バター作り体験」

11月8日、豊原小学校で株式会社明治の栄養士を迎えて食育授業がありました。授業を受けた同校2年生34人は、朝ごはんを食べる大切さを学んだ後、バター作りを体験。生クリームが入った容器を音楽に合わせて元気よく振った後、固まった脂肪分を割りばしでかき混ぜてバターを作りました。児童たちは、容器を振ってできたバターを見て「すごーい。こげんなるとたい」とびっくり。出来上がったバターは、クラッカーに付けてみんなで試食しました。



出来上がったバターを容器から取り出す児童たち

新米を仏様にと荷が届く

水も人も
キラリ

川柳

今月の入選作品・課題「米」

佐藤良子(蒲生)

米は古来日本人の主食としての食べ物ばかりでなく日本人の慣習やお祭りの中に「豊作を祈る」という「文化」として生き続けてきた。私たちは「落穂拾い」で一粒の米の大切さを体感した。戦中戦後を含め米は昔から物価の物指しでもあった。仏様への真っ白い米が政治に翻弄されている。

流青

ああ師走米研ぎ終えて足るを知る
腹立ちてやさしく米を研ぎ始め
米粒が孫のほっぺで笑ってる
新米の香り輝き今日の幸
新米の湯気まで甘く肥える秋
米持つてポン菓子音せき立てる
いつてきます朝の元気はお米から
米を研ぐ確かな明日を生きたため
こぼれ出た一粒の米拾う母
新米の粒々光り母恩ぶ
神前に新米供へる村の人
新米を送れば嫁の弾む声
一人住み古米減らぬと娘や孫に
米に混ぜ麦粟食った日もあった
これからの米生産にある不安
山頂で日本一の握り飯
終戦後修学旅行の供に米
新米を息子が出来たら持たせよう
戦後ぼく瓶で玄米搗いていた

川柳を募集しています。選句者は梅崎流青さん。1月の課題は「新春を詠む」です。入選作品は1月1日号に掲載します。

●応募方法 川柳と明記し、自作、未発表の作品(※1人3句以内)に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報係(☎77・8425、FAX 74・5520)へ、12月15日(※必着)までにお送りください。

かんかんと下駄のひびきも年新た

流青

昔ながらの農機具で農作業

徳益の横山さんが「ぶりこ」で大豆を脱穀

大豆の生産量が県内一を誇る柳川。11月の中旬から中旬にかけて、大豆の収穫が行われました。横山一吉さん(77歳、徳益)は、昔ながらの農機具「ぶりこ」を使って、11月16日に大豆「ふくゆたか」の脱穀作業を行いました。ぶりこは、上下に振って柄の先についた木の棒を回転させながら、穀物をたたいて脱穀させる農機具。横山さんは「先についた棒全体で大豆をたたかないとうまく脱穀できません。今は機械化が進んで、ぶりこをほとんど見かけなくなりました」と話しました。



ぶりこを使って大豆を脱穀する横山さん